幸福の赤いサクランボ

金山で栽培 夢を現実に

31歳の私の長男は昨年9月、東京大学から文学博士の学位を授与され、この4月、鹿児島大学法文学部准教授に就いた。長女も今春、東京芸術大学大学院美術研究科に進学した。昨年4月のコラムでも触れたが、私は就農してからこれまで、子供たちがそれぞれに夢を抱きながら努力している姿を見て、私自身が頑張らなくては、と気力を奮い立たせてきた。

ふたりは1980年代に金山町で生まれ、小学生時代まで過ごした。町から離れて19年経った今でも「金山のことは一日も忘れたことがない」と言っている。

私たち家族の金山町への思い入れの源は、この町の四季の移ろいが、私の知っているどんな町よりもはっきりと感じ取れることだ。

私たちが暮らしていた時だけでなく、山辺町に移ってからも金山町にかかわるイベントなどで多くの人と知り合い、今でも親しくさせていただいている。その人々も同じように思っているだろう。

サクランボの増産に向けて、金山町での栽培を考え始めたのは随分前のことだ。

良質なサクランボを生産するための条件は、雪解け後から収穫までの期間では、村山地方より金山町が優れていると思われる。しかし、収穫時期が村山地方より1週間程度遅く、冬の積雪は2㍍にもなり、山辺町から約80キロ離れている。これらの点がネックになると思い、なかなか踏み出せなかった。

昨年4月に東北大学大学院を修了して入社した安食政史君と語り合い、何度か金山町を訪れた。25年ほど前からサクランボ栽培を続けておられる方々や県農林水産部の方々にもお話を伺った。その結果、雪に備えた工夫などをすれば大規模な栽培は可能と判断した。

還暦を過ぎた今、私は子供たちに負けない夢を、安食君とともに現実のものとして金山町で膨らませようと思っている。

将来園地を拡大する際に植える苗木畑を手入れする安食政史さん＝山辺町

多田耕太郎　1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1ヘクタールのサクランボ園を経営する。